

# 知っているようで知らない、灯台下暗し「山の神神事」

～山の神は女性でしかもかないのヤキモチ焼き。それにはワケがある～

解説 ヤッサシイ会(南滋賀村の歴史を学ぶ会) 井田久雄



## 滋賀村の山の神

南滋賀には、「福王子神社」「大伴神社」のそれぞれの奥まったところに「山の

神」が鎮座されております。この山の神の神事は、他地域とは少し違い、毎年1月の三ヶ日を過ぎた最初の日曜日に催行されます。(今年はコロナ感染予防に為中止)

山の神は「女神」でヤキモチ焼きと言われていています。つまり山の神神事は、「婿入り」の神事となります。神事当日は、氏子総代、自治会役員らにより、朝から稲わらで蛇を作製し、婿入り七つ道具（農機具の模型：鋤・鍬・鎌・鋸・鉋・馬鍬・唐鋤）とお神酒の竹・生の松の木で作った男代物・イワシ（オコゼの代りと考えられる）をカワラケに挟み、これらを蛇に付け、年男（現在は農業委員長）が身体に巻き、御幣を12本（干支の数）指し、宮司さん先頭に、山の神へ。この女神は、かなりの醜女で、ヤキモチ焼きとの言い伝えがあります。途中でもし他の女性に、今年の婿様を見られて、機嫌を損ねられては大変なので婿入り道中の家々は雨戸を閉め、女性は布団をかむり女性が覗くのを防ぎ、なおかつ、行列の先頭を前ぶれが“出なよう、出なよう

稲藁で作った蛇



大伴神社用

お供え物

福王子神社用



ナラ鉋

男代物

鎌

馬鍬

唐鋤

クワ

鋤

スギ鋤

ノコギリ鋸



婿入り装束

“とふれながら町内を抜け、婿入りとなります。蛇をほこらの脇に奉納、祠の屋根に山仕事で滑り落ちない様にと又木を掛け（最近は見られなくなりました）、その年の山仕事・田畑の仕事の安全、農作物の豊穰を祈願する。この行事が終われば、その年のいろいろな山仕事、農作業を始めます。



福王子神社山の神

稲藁で作った蛇

他地域では神の名称は異なるが、その総称は「山の神」「山神」でほぼ共通しています。その性格や祀り方は、山に住む山民と、麓に住む農民とで異なる。どちらの場合も、山の神は一般に女神であるとされており、そこから自分の妻のことを謙遜して「山の神」という表現が生まれた。農民の間では、春になると山の神が、山か

ら降りてきて田の神となり、秋には再び山に戻るという信仰がある。すなわち、1つの神に山の神と田の神という2つの霊格を見ていることになる。農民に限らず日本では死者は山中の常世に行き、祖霊となり子孫を見守るという信仰があり、農民にとっての山の神の実体は祖霊であるという説が有力である。正月にやってくる年神としがみも山の神と同一視される。山は農耕に欠かせない水の源であるということや、豊饒ほうじょうをもたらす神が遠くからやってくるという来訪神（客神・まれびとがみ）の信仰との関連もあるようです。



オコゼ

- 1) 京都北山杉林業での大山祇神（おおやまずみのかみ）は、猟師・木樵・炭焼きなどの山民にとっての山の神は、自分たちの仕事の場である山を守護する神である。これは、山の神が山民にとっての産土神（うぶすながみ）でもあったためであると考えられる。山民の山の神は禁忌に厳しいとされ、祭の日（一般に12月12日、1月12日など、12にまつわる日）は、山の神が木の数を数えるとして、山に入る事を禁止されており、この日、山に入ると木の下敷きになって死んでしまうという。
- 2) 長野県南佐久郡では7、大晦日に山に入ることを忌まれており、これを破ると「ミソカヨー」又は、「ミソカーイ」という何者かの声が聞こえ何者か確かめようとして振り返ろうとしても首が回らないといい、山の神や鬼の仕業と伝えられている。又、女神であることから出産や月経の穢れを特に嫌うとされるほか、祭への女性の参加は許されてこなかった。山の神は醜女で自分より醜いものがあれば喜ぶとして、顔が醜いオコゼを山の神に供える習慣もある。